

英語における時制と相の関係

三 宅 英 文

Relationships Between Tense and Aspect in English

Hidefumi MIYAKE

Abstract

As far as the relationships between tense and aspect in English are concerned, the definition that past and present forms of a verb are counted as tenses because they are indicated by the inflections while perfect and continuous forms are counted as aspects because they are syntactically realized is widely accepted. However, according to Comrie's (1976) definition, tense and aspect are not mutually exclusive notions, but are different viewpoints on time a verb form expresses. In reality, without using the progressive forms, progressive aspect can also be expressed by using a certain type of words like "keep" and making the "keep + -ing" structure. The existence of these types of verbs indicates that the definition of tense and aspect in English depending on the verbal inflections and syntactic structures is too narrow in scope and that we need a different definition based on the concepts, not the forms. This study revisits the definition of tense and aspect in general. By analyzing the syntactic structures of sentences that include verbs functioning in "time-phase," it points out that tense and aspect in English are realized at both grammatical and lexical levels.

Keywords : tense, aspect, time-phase verbs, sentence patterns, grammaticality

1. 研究目的

我々は現実及び仮想上の出来事をさまざまな時間表現を用いて描写している。この時間表現に関わる概念が時制 (tense) と相 (aspect) である。英語におけるこの二つの概念の関係は、これまでさまざまな言語学者によって取り扱われてきた。しかし、これらの概念の解釈の違いが大きな混乱を引き起こしている。これは、英語という相を表すための明確な動詞の形式を持たない言語に対し、他の言語において特定の形式で表現される相という概念を当てはめようとしていることに原因がある。

現在、広く支持されている英語の時制と相の関係は、Quirk and Greenbaum (1975), Quirk, Greenbaum, Leech, and Svartvik (1985), Greenbaum (1996), Leech and Svartvik (2002) らによって定義されているものである。Leech and Svartvik (2002) は、時制と相の関係を次のように説明している。

By *tense* we understand the correspondence between the form of the verb and our concept of time (past, present, or future). English has two simple tenses: the present tense and the past tense. ... *Aspect* concerns the manner in which a verbal action is experienced or regarded, for example as complete or in progress. English has two marked aspects: the progressive aspect and the perfect aspect. (Leech and Svartvik 2002: 415)

彼らの理論では、時制は出来事と時間を結び付ける動詞の形式で、英語の時制には動詞の活用で表される過去と現在しかなく、助動詞willとの組み合わせで示される未来表現は時制と認めていない。一方、相は動詞で表される動作がどのように見られているか、または経験されるかを反映する文法表現であると考えている。英語には動作の完了を示す完了相と動作の未完了を示す進行相があり、これらはそれぞれ完了形と進行形という文法形式によって示されると言うのである。

しかし、完了形や進行形は本当に時制と区別して考えて良いものなのであろうか。本論文では、英語の時制と相の概念の違いを明らかにするため、多言語間の時制と相の比較研究を行っている Comrie (1976) の研究を参照し、先に述べた理論の妥当性について検討を行う。その後、英語の時制と相の関係を多元的に捉えている学者の理論を紹介する。その理論の妥当性を検証するため、「動詞+不定詞または動名詞(現在分詞)」の文構造の分析を行い、その分析結果をもとに英語における時制と相の概念の関連性についてまとめる。

2. Comrie (1976) の時制と相の定義に基づく検討

時制や相を定義する場合、その概念ができるだけ多くの言語に当てはまるようにすることが望ましい。なぜなら、同一の基準を設定することにより、言語間の表現形式の相違について容易に比較検討を行うことができるからである。Comrie (1976) は、相を表す表現形式を持つ言語であるロシア語やスラブ諸語と相を表す特定の形式を持たない言語についての比較研究を行い、双方に当てはまる時制と相の概念を定義している。

まずComrie (1976) の時制に対する定義を見てみよう。

... there is the semantic concept of time reference (absolute or relative), which may be grammaticalised in a language, i.e. a language may have a grammatical category that expresses time reference, in which case we say that the language has tenses. Many languages lack tenses, i.e. do not have grammaticalised time reference, though probably all languages can lexicalise time reference, i.e. have temporal adverbials that locate situations in time, such as English *today*, *the year before last*, *at five o'clock*. (Comrie 1976: 6)

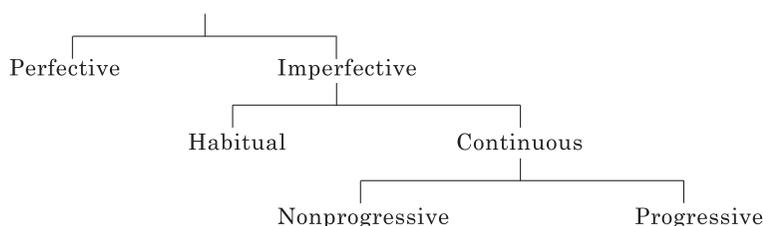
Comrie (1976) は、時間の表示には絶対時制 (absolute tense) と相対的時間表現 (relative time reference) が存在すると考えている。絶対時制とは、話者の発話時と situation (ある1つの動詞で示される動作や状況) の時間関係を直接反映する表現である。一方、相対的時間表現は、当該の situation を他の situation との関係によって示す表現である。相対的時間表現の例としては、non-finiteの動詞表現が挙げられる。たとえば、Walking into my room, I felt something strange. のような分詞構文に用いられている walking の時間は、主節の動詞 felt の時制によって相対的に判断されるのである。ある言語がこれらのような時間の枠組みに言及する文法化した表現を持つとき、その言語は時制表現を持つと判断される。そのため、時間表現の文法化の有無により、言語によって時制の数は異なることになる。

一方, Comrie (1976) は相について次のように定義している。

Aspect is not concerned with relating the time of the situation to any other time-point, but rather with the internal temporal constituency of the one situation; one could state the difference as one between situation-internal time (aspect) and situation-external time (tense). (Comrie 1976: 5)

Comrie (1976) によれば, 相は1つの situation を全体で捉えるか一部分で捉えるか, 習慣的と捉えるか継続的と捉えるか, 進行と捉えるか非進行と捉えるかなど, 動詞のどの部分に視点を当てるかに関わる表現方法である。さまざまな相の関係は以下のように図示される。

Table 1. Classification of aspectual opposition



(Comrie 1976: 25)

Comrie (1976: 3) は, 英語の He read. と He was reading. という文は同じ絶対過去時制に属するものの, 相が異なると説明している。また, John was reading when I entered. という文を取り上げ, 前者の was reading は imperfective (非完了) の相を持つのに対し, 後者の entered は perfective (完了) の相を持つとしている。これは, 前者の was reading が「読む」という行為の中間地点しか示さないのに対し, 後者の entered が「入る」という動作全体を分割できない一まとまりの行為と捉えているからである。つまり, 英語の場合, 完了形という統語形式を用いなくても, 動詞の活用のみによって示される単純過去形においても完了相は表されているのである。

ここで, Comrie (1976) の定義に基づいて Greenbaum (1996) の相の定義を検討してみよう。

The aspect of the verb refers primarily to the way that the time of the situation is regarded rather than its location in time in absolute terms. English has two aspects: the perfect aspect and the progressive (or continuous) aspect. The aspects are expressed by a combination of an auxiliary and a following verb. The perfect aspect (as in 'I *have written* many times before now') is primarily used to place the time of one situation relative to the time of another situation. The progressive aspect (as in 'I *am writing* a letter to my parents') primarily focuses on the duration of the situation. (Greenbaum 1996: 253-4)

Greenbaum (1996) の説明に従えば, 完了相はある situation の時間を他の situation の時間との相対関係で位置づける表現形式ということになる。これは Comrie (1976) の定義に当てはめれば, 相ではなく相対的時制に分類されるべき表現である。つまり, 英語に関して Greenbaum のような形で時制と相の定義を行えば, 他の言語にも当てはまる形で時制と相の線引きを行うことができなくなってしまうのである。

Huddleston and Pullum (2002) の理論は, 未来時制を認めていないという点では Greenbaum

(1996)らと同様である。しかし、彼らは英語の時制を動詞の屈折だけで判断していない。彼らの理論では、第一時制 (primary tense) に過去形 (preterite) と現在形 (present), 第二時制 (secondary tense) に完了形 (perfect) と非完了形 (non-perfect) を設定している。つまり、完了形は統語的表現であるにも関わらず、時制の範疇に入る表現と考えているのである。その主な理由は、non-finite の節において「to have+過去分詞」が過去を示す文法化された表現であるということである。このことは、単純過去形だけでなく、完了形も同時に時制と相の概念を反映する表現であるという可能性を示している。このような立場に立てば、英語の時制と相の区分は単純に動詞の活用とか統語表現という表現形式によって判断してはならないということになる。

3. 英語の中に様々な時制と相を認める立場

これまでの学説とは異なり、Declerck (1991) は多元的立場から時制と相の関係を捉えている。Declerck (1991: 54) は、時制を発話時 (time of utterance) と当該の situation の時間関係、および当該の situation と他の基準時 (time of orientation) との時間関係を表す動詞の形式と定義し、現在、過去、未来、現在完了、過去完了、未来完了、条件時制 (conditional tense), 条件完了 (conditional perfect) の8つの時制を設定している。

一方、相については、“The verb may have one or more special forms to express one of the aspects. Aspects are different ways of viewing a situation” (Declerck 1991: 55) と説明し、(1) 完了相 (perfective) と未完了相 (imperfective), (2) 起動相 (inceptive), (3) 終動相 (terminative), (4) 習慣相 (habituality), (5) 反復相 (iterative) の5種類を設定している。これらの相は、文法的表現と語彙の両方によって具現化される。

完了相はある動詞で表される situation 全体を捉える表現、未完了相は situation の一部を捉える表現である。英語では、現在、過去、未来という時間の枠にとらわれることなく、非進行形 (non-progressive) であれば完了相、進行形 (progressive) であれば未完了相を示すことになる。つまり、文法の面からは、完了相と未完了相の区別は非進行形か進行形かという形式の違いによって判断することが可能である。

しかし、未完了相は、同時に語彙のレベルによっても表現される。起動相は situation の最初にだけ焦点を当てる相である。Declerck (1991: 56) によれば、英語ではこの相は begin, start, commence などの語彙 (aspectualizer) によって示される。同様に、終動相は situation の最後にだけ焦点を当てる相であるが、Declerck (1991: 56) はこの相も、起動相同様、stop, finish, end, break off, complete, leave off, conclude, cease などの語彙によって示されると主張している。

習慣相は、ある situation が一定の期間において周期的に行われることを表す。英語では、過去の習慣を示す would や used to という語彙が顕著な例となっている。

反復相は、同じ時間帯に同じ situation が何度か繰り返されることを示す。Declerck (1991: 57) によれば、反復相は二つの表現によって具現化される。一つ目は、The murderer repeatedly coshed his victim on the head. のように動詞の単純時制に repeatedly という繰り返しを表す副詞表現を加える方法、二つ目は、動詞が瞬時に完了してしまう性質のものである場合、Someone was tapping on the window. のように副詞表現のない進行形を用いるという方法である。

次に Halliday (1996) の唱える選択体系機能文法における時制と相の枠組みを考えてみよう。Halliday の理論では、時制は過去、現在、未来の表現の繰り返しによって表される。完了形や

進行形は、第一時制である過去、現在、未来形の範疇の中で更に過去や現在を表す第二時制と考えられている。つまり、現在進行形 *is taking* は「現在の現在」(present in present)、過去完了形 *had taken* は「過去の過去」(past in past) として時制システムの中に組み込まれているのである。そのため、完了形も進行形も含めた最も広い範囲の時制を認める立場となっている。

この Halliday の時制の定義は、先に見た Comrie (1976) の定義に反するものではない。完了形、進行形、*be going to* という文法形式は、原則的に第一時制に設定されたある基準時に対して、過去(以前)、現在(同時)、未来(以後)という相対的な時間的対立を生み出す文法形式となっている。そのため、相対的時制表現としての役割を十分果たしていると判断される。

また、Declerck (1991) が *aspectualizer* と呼んでいる動詞群は、選択体系機能文法においては「時位相」(time-phase) という枠組みで説明されている。時位相は、Declerck の理論と同様、時制を表す文法形式と語彙という二つの次元によって具現化される。具体的には、ある situation の内的時間は、進行形という時制を表す文法形式および特定の語彙によって表現されるのである。

Halliday (1996: 279) は、「継続」(durative) を表す語彙表現の例として *keep (on) doing* と *goes on doing*、「開始」(inceptive) の始まりに焦点を当てる語彙の例として *starts doing / to do*, *begins doing / to do*, 終わりに焦点を当てる語彙の例として *gets doing*, *stop doing*, *ceases doing / to do*、「開始継続」(inceptive - durative) の例として *takes to doing* を挙げている。

それでは、英語の場合、Declerck (1991) や Halliday (1996) の指摘する相や位相を表す動詞群(以下、位相動詞)はどの程度文法化された存在なのであろうか。以下、これらの動詞を含む文構造について考察してみよう。

4. 位相動詞の文法性

これまで英語の基本的な文構造について多くの研究がなされてきた。日本の英語教育に最も大きな影響力を持っているのが、文構造を、主語(S)、述語動詞(V)、目的語(O)、補語(C)の4つの言語ユニットの組合せから判断するいわゆる5文型である。それらの形式は、(1) S+V, (2) S+V+C, (3) S+V+O, (4) S+V+O+O, (5) S+V+O+C となっている。多くの参考書では、この5文型に、*there is* 構文や *seem*, *appear*, *happen* などの動詞を含む特殊な文型を加えて文構造の説明がなされている。最近では、付加詞(A = adjunct)の重要性を認識し、S+V+A, S+V+C+A, S+V+O+A のような第1文型、第2文型、第3文型の派生形を含めて8文型として説明している文法書もある。

本研究では、Declerck や Halliday の指摘する位相動詞の中から、(1) *begin*, (2) *start*, (3) *keep*, (4) *continue*, (5) *stop*, (6) *finish* を取り上げ、これらの動詞を含む文の文型を判断する。上記の6つ位相動詞において、*begin*と*start*が動作の開始時を、*keep*と*continue*が動作の中間(継続)時を、*stop*と*finish*が動作の終結時を示すものとなっている。文型を特定する際、文中の構成素がどのような単位で成り立っているのか、どのような形式の受動化が可能なのかに注目する。

調査の方法は、対象となる位相動詞を含む強調構文と受動文の文法性を、安田女子大学文学部英語英米文学科に所属する3名の英語母語話者の教員に判断してもらうというものである。3名のうち2名がイギリス人、1名がアメリカ人である。アンケート用紙を準備し、それぞれの文に対して完全に文法的であると判断される場合には○印、典型的ではないが可能であるという場合には△印、完全に非文法的であると判断される場合には×印をつけてもらった。強調構文の調査

においても受動文の調査においても、例文は全て「①位相動詞+②動名詞（現在分詞）または不定詞+③目的語 the problem」という3つの構成素からなる文になっている。通常、これらの位相動詞を含む文は、不定詞あるいは動名詞以下の要素が目的語の役割を果たす第3文型と考えられている。

4.1. 構成素分析

強調構文を用いた構成素分析の結果は以下の通りである。

(1) They began solving / to solve the problem.

| | | | |
|---|---|---|--|
| ○ | ○ | △ | It was the problem that they began solving. |
| ○ | ○ | △ | It was the problem that they began to solve. |
| △ | △ | △ | It was solving the problem that they began. |
| × | × | × | It was to solve the problem that they began. |

(2) They started reading / to read the book.

| | | | |
|---|---|---|--|
| ○ | ○ | △ | It was the book that they started reading. |
| ○ | ○ | △ | It was the book that they started to read. |
| △ | △ | △ | It was reading the book that they started. |
| × | × | × | It was to read the book that they started. |

(3) They kept discussing the problem.

| | | | |
|---|---|---|---|
| ○ | ○ | △ | It was the problem that they kept discussing. |
| × | × | × | It was discussing the problem that they kept. |

(4) They continued solving / to solve the problem.

| | | | |
|---|---|---|--|
| ○ | ○ | △ | It was the problem that they continued solving. |
| ○ | ○ | △ | It was the problem that they continued to solve. |
| △ | △ | △ | It was solving the problem that they continued. |
| × | × | × | It was to solve the problem that they continued. |

(5) They stopped solving the problem.

| | | | |
|---|---|---|---|
| ○ | ○ | △ | It was the problem that they stopped solving. |
| △ | △ | △ | It was solving the problem that they stopped. |

(6) They finished discussing the problem.

| | | | |
|---|---|---|---|
| ○ | ○ | △ | It was the problem that they finished discussing. |
| △ | ○ | △ | It was discussing the problem that they finished. |

調査結果を見る限り、「①位相動詞+②動名詞（現在分詞）または不定詞」の結束性の方が、「②動名詞（現在分詞）または不定詞+③目的語 the problem」の結束性よりも強い。つまり、

英語母語話者は「①位相動詞+②動名詞（現在分詞）または不定詞」を一まとまりの構成素として捉える傾向が強いと言える。このことは、文の構成素を考える際、動詞は「①位相動詞+②動名詞（現在分詞）または不定詞」で一まとまりであり、目的語となるのは「②動名詞（現在分詞）または不定詞」が他動詞の場合に取る目的語の部分ということを示している。視点を変えれば、位相動詞が begin to run / running や keep running, stop running のように自動詞と組み合わせられた場合、目的語は存在せず、これらはS+Vの第1文型に範疇分けされるべきであると考えられる。

4.2. 受動文分析

受動文の文法性に関しては、動作主 (doer) がないと不自然と判断される場合があるため、必要に応じて自由に動作主を補ってもらう形で調査を行った。結果は以下に示す通りである。

(1) They began solving / to solve the problem.

| | | | |
|---|---|---|--|
| × | × | × | The problem was begun solving (by ~). |
| × | × | × | The problem was begun to solve (by ~). |
| × | △ | ○ | The problem began being solved (by ~). |
| ○ | △ | ○ | The problem began to be solved (by ~). |
| △ | × | ○ | Solving the problem was begun (by ~). |
| × | × | △ | To solve the problem was begun (by ~). |

(2) They started solving / to solve the problem.

| | | | |
|---|---|---|--|
| × | × | × | The problem was started solving (by ~). |
| × | × | × | The problem was started to solve (by ~). |
| × | ○ | ○ | The problem started being solved (by ~). |
| ○ | ○ | ○ | The problem started to be solved (by ~). |
| ○ | △ | △ | Solving the problem was started (by ~). |
| × | △ | × | To solve the problem was started (by ~). |

(3) They kept discussing the problem.

| | | | |
|---|---|---|--|
| × | × | × | The problem was kept discussing (by ~). |
| ○ | ○ | ○ | The problem kept being discussed (by ~). |
| × | △ | × | Discussing the problem was kept (by ~). |

(4) They continued solving / to solve the problem.

| | | | |
|---|---|---|--|
| × | × | × | The problem was continued solving (by ~). |
| × | × | × | The problem was continued to solve (by ~). |
| △ | △ | ○ | The problem continued being solved (by ~). |
| × | △ | ○ | The problem continued to be solved (by ~). |
| △ | △ | △ | Solving the problem was continued (by ~). |
| × | △ | × | To solve the problem was continued (by ~). |

(5) They stopped solving the problem.

| | | | |
|---|---|---|--|
| × | × | × | The problem was stopped solving (by ~). |
| △ | × | ○ | The problem stopped being solved (by ~). |
| ○ | △ | △ | Solving the problem was stopped (by ~). |

(6) They finished discussing the problem.

| | | | |
|---|---|---|--|
| × | × | × | The problem was finished discussing (by ~). |
| × | ○ | ○ | The problem finished being discussed (by ~). |
| △ | △ | ○ | Discussing the problem was finished (by ~). |

受動化の例は、語彙によって英語母語話者の意見に若干の相違が観察される。しかしここで注目すべき点は、the problem を主語とした受動文を作成する際、受動化される動詞は「①位相動詞」ではなく、「②動名詞（現在分詞）または不定詞」の部分であるということである。これは、位相動詞が目的語 the problem に対して直接的な関わりを持っていないということを示している。この結果も、文構造において位相動詞が不定詞句や動名詞句という目的語をとるのではなく、「①位相動詞+②動名詞（現在分詞）または不定詞」で一まとまりの構成素となるという3.1の分析結果を支持するものと考えられる。

5. 考 察

これらの調査結果はどのように捉えれば良いのであろうか。上記の位相動詞の分析結果を、後ろに不定詞や動名詞を取る他の一般的な動詞の例と比較してみよう。ここで比較例として取り上げるのは、(7) want と (8) enjoy である。両方とも精神活動を示す動詞であるが、want は後ろに不定詞（句）を、enjoy は動名詞（句）を取るという違いがある。

まずは強調構文による構成素から見てみよう。

(7) They wanted to solve the problem.

| | | | |
|---|---|---|---|
| ○ | ○ | △ | It was the problem that they wanted to solve. |
| △ | △ | △ | It was to solve the problem that they wanted. |

(8) They enjoyed solving the problem.

| | | | |
|---|---|---|---|
| ○ | ○ | △ | It was the problem that they enjoyed solving. |
| ○ | ○ | △ | It was solving the problem that they enjoyed. |

これらの結果が示しているのは、「want+不定詞+目的語」の構造は、位相動詞と同様、「want+不定詞」の結びつきが「不定詞+目的語」よりも強いということである。それに対し、「enjoy+動名詞+目的語」の構造では、「enjoy+動名詞」も「動名詞+目的語」の結びつきも同等の強さである。つまり、これらの例文では「want+不定詞+目的語」は「want+不定詞」が動詞句となる第3文型、一方、「enjoy+動名詞+目的語」の場合は、enjoy が単独で動詞の役割を担う第3文型と「enjoy+動名詞」が動詞の役割を担う第3文型の二重の分析が可能ということになる。

次にそれぞれに対応する受動文を見てみよう。

(7) They wanted to solve the problem.

| | | | |
|---|---|---|---|
| × | × | × | The problem was wanted to solve (by ~). |
| × | × | × | The problem wanted to be solved (by ~). |
| × | △ | △ | To solve the problem was wanted (by ~). |

(8) They enjoyed solving the problem.

| | | | |
|---|---|---|--|
| × | × | × | The problem was enjoyed solving (by ~). |
| × | × | × | The problem enjoyed being solved (by ~). |
| × | △ | △ | Solving the problem was enjoyed (by ~). |

ここで注目すべき点は、want や enjoy という動詞は主語に知覚能力を持つ存在を必要とするため、The problem wanted to be solved. や The problem enjoyed being solved. のような形式で後続する不定詞句や動名詞句の受動化を許さないということである。

一方、位相動詞の場合、このような主語の選択制限を伴わない。文の受動化に関わるのは、位相動詞に後続する動詞の方なのである。これは、位相動詞が situation の内容ではなく、situation の内的時間だけを示す半文法化された形式であることを示している。位相動詞は、助動詞と一般動詞の中間的な性質を持つ存在なのである。そして、このような半文法化された位相動詞の存在は、英語の時制と相との関係を考える際、「動詞の活用によって表される時間が時制であり、統語によって表される完了形と進行形が相である。」という考え方では英語が表す時間表現を正確に捉えきれていないということを物語っている。なぜなら、位相動詞は明らかに時制と相の両方を同時に表しているからである。

6. ま と め

本研究では、Comrie (1976) の定義を基に英語の時制と相の関係について考察してきた。Comrie (1976) の定義では、時制と相は時間表現における相補的な概念である。そのため、一つの動詞表現の中に双方の存在を認めることが可能である。たとえば、英語の場合、単純過去形は時制を表す表現であるのと同時に完了相を表す。また、完了形は、完了相を表す表現であるのと同時に situation 間の相対的な時間関係を表す時制表現でもある。

更に、英語には助動詞と同じような形で時間表現に関与する位相動詞群が存在する。これらの動詞は situation の内容に対して直接的な関わりを持たないため、受動化の際、過去分詞化されず、後続する不定詞や動名詞（現在分詞）が過去分詞化される。これらの動詞の役割は、後続する不定詞や動名詞（現在分詞）と一体化して一つの動詞句を形成し、不定詞や動名詞（現在分詞）が表す situation の一部分にのみ焦点を当てることなのである。このような半文法化した位相動詞は、進行相と同じ未完了の意味を表す。つまり、英語の場合、相は統語という文法レベルだけでなく語彙レベルにおいても具現化されるものなのである。

今回の研究結果は、英語の時制と相の関係を考える際、動詞の活用と統語構造のみを判断基準とする区別では不十分であり、多元的枠組みが必要であることを示唆している。今後は、will の

文法性や進行形の相対的時制性も考慮し、英語の時制と相の全体の枠組みについて更に検討を加えてゆきたい。

謝辞

本研究の文法性の判断において、Richard Gabbrielli 先生、Taras Sak 先生、John McLean 先生には、お忙しい中、貴重な時間を割いて快く協力していただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

参 考 文 献

- 安藤貞雄 (1983) 『英語教師の文法研究』 東京：大修館書店
- Bache, C. (2008) *English Tense and Aspect in Halliday's Systemic Functional Grammar*. London: Equinox.
- Cloran, C. (2010) "Rhetorical Unit Analysis and Bakhtin's Chronotype" *Functions of Language* 17:1. pp29-70.
- Comrie, B. (1976) *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Declerck, R. (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. 東京：開拓社.
- 江川泰一郎 (1991) 『英文法解説 改定三版』 東京：金子書房
- Greenbaum, S. (1996) *The Oxford English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Halliday, M.A.K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar* 2nd Edition. London: Edward Arnold.
- Hornby, A.S. (1976) *Guide to Patterns and Usage in English* 2nd Edition. Oxford: Oxford University Press.
- Huddleston, R. and Pullum, G.K. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 池上嘉彦 (1991) 『<英文法>を考える』 東京：筑摩書房
- Jespersen, Otto. (1933) *Essentials of English Grammar*. London: George Allen & Unwin.
- Leech, G. and Svartvik, J. (2002) *A Comprehensive Grammar of English* 3rd Edition. Essex: Pearson Education.
- Quirk, R. and Greenbaum, S. (1975) *A University Grammar of English* 4th Edition. London: Longman.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., and Svartvik, J. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. New York: Longman.
- 杉山忠一 (1998) 『英文法詳解』 東京：学研教育出版
- Thomson, A.J. and Martinet, A.V. (1986) *A Practical English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- 綿貫陽他 (2000) 『徹底例解ロイヤル英文法』 東京：旺文社
- 綿貫陽, ピーターセン・マーク (2006) 『表現のための実践ロイヤル英文法』 東京：旺文社

[2015. 6. 25 受理]